

ヒロハセネガの栽培について

～ヤマトトウキに続く、新規薬用作物の産地への導入を目指して～

農業研究開発センターでは、今後新たに本県に導入が可能な薬用作物の検索を進めています。前号ではカノコソウについて紹介しましたが、今回は、ヒロハセネガについてご紹介します。

1. 背景と目的

ヒロハセネガは、ヒメハギ科の植物で、北米原産です（図1）。日本には明治時代に導入されました。日当たりがよく排水のよい土地を好みます。根を生薬セネガとして用います（図2）。

根には、特有のサリチル酸メチル臭があり、気管支炎などの去痰薬に用いられています。兵庫県丹波市が国内有数の原料生薬産地となっています。原料生薬として、平成28年度で国内で3,615kgが使用されています（日本漢方生薬製剤協会 2019）。日本では、他の生薬は原料の多くを中国産が占めていますが、セネガについては国産が主に使用され、安定した需要があります。

宇陀市内では、2019年度から新たに4戸の農家が試作栽培を開始しました。

ヒロハセネガは3月にほ場に直播し、晩秋に次作のための自家採種を行った後、年内に根を収穫、水洗・乾燥して出荷します（図3）。初期の生育が遅く草姿も小さいため、雑草対策が不可欠です。そこで、ポリマルチを用いた栽培について検討しました。また、2019年度の宇陀市内の現地試作ほ場のうち2ヶ所について、収量を調査し、成分を分析しました。

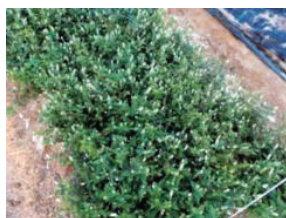


図1 ヒロハセネガ



図2 生薬セネガ

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
おもな作業			播種		除草	追肥 除草	除草	除草				採種 収穫

図3 ヒロハセネガ栽培暦

2. 研究成果の概要

- ①黒マルチと白黒マルチを用いて、2018年及び2019年の2ヶ年において栽培を行いました。いずれの年次においても、黒マルチでやや収量が多くなる傾向がみられました。雑草対策としてはいずれのマルチも同等と考えられることから、夏期昇温抑制効果のある白黒マルチを用いなくても、より安価な黒マルチで十分に栽培が可能であると考えられました。

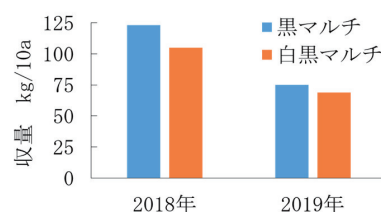


図4 マルチの種類が乾物収量に及ぼす影響

- ②現地試作圃場における収量調査及び成分の分析結果は表1のとおりでした。収量にはやや開きがあるものの、いずれの栽培品も、日本薬局方規格値を満たす結果が得られました。

表1 現地試作ほ場における収量調査および成分分析結果

場所	10aあたり 乾物収量 (kg)	重金属 (ppm)	ヒ素 (ppm)	乾燥 減量 (%)	灰分 (%)	酸不溶性 灰分 (%)	希エタノール エキス (%)
大宇陀	111	適	適	9.9	2.8	0.5	40.0
榛原	62	適	適	8.5	3.7	0.8	41.2
日本薬局方 規格値	—	10 以下	5 以下	13.0 以下	5.0 以下	2.0 以下	30.0 以上

3. 実用化に向けた対応

ヒロハセネガには、雑草対策の他にも、毎年大量に必要となる自家採種種子の効率的な確保、連作障害対策など、解決が必要な課題があります。国産が求められ、収益性も高い薬用作物であることから、これらの課題についても、今後、研究開発を進め、現地での栽培の安定化を図っていく予定です。

(大和野菜研究センター 大谷 正孝)